

「黄金の国」¹の再構築

——ドラブルの *The Realms of Gold* (1975) の考察——

風間末起子

Abstract

The term “community” is one of the key concepts in comprehending all the novels by Margaret Drabble (1939-). The themes of the seventh novel, *The Realms of Gold* (1975), above all, emphasize and affirm the significance of community, continuity, and human ties.

Although the “realms” cited from the first line in John Keats’ brilliant sonnet “On First Looking into Chapman’s Homer” can be construed as being associated with intellectual and imaginary travel searching for something precious and Utopian, at the same time, the “realms,” for the two major female characters, Frances Wingate and Janet Bird, indicate the social frame used to allot men and women to their place in the human community, such as the married couple, family, and relatives. These social frames can be very often burdensome and tangled for those characters owing to suffocative restraint and conflict, though they realize that it can be a necessary social unit for most men and women.

However ambivalent the feelings of her characters might be, and however intractable her characters’ family problems might be, Drabble never tries to demolish the family institution; rather, she attempts to reconsider and “reconstruct” the family construction, not to deconstruct it. Her major characters see the realms of family as not solid or definite, but fluid and uncertain, and they perceive that it has the potential for changing, developing, and transforming with human wisdom, effort, and imagination. In this article, I would like to examine how the writer reconstructs “the realms of the gold” through illustrating the everyday rites and family ties, such as a party, a funeral, and the travel into the past to visit the home and hometown of relatives.

キーワード： パーティと葬儀、過去への旅、“non-verbal communication”
の評価、語り手の語りの放棄、枠組みの流動性と不安定性

序

ドラブル (Margaret Drabble, 1939-) の小説にとって、“community”という用語は重要なキーワードである (Cooper-Clark, 25; Hardin, 291)。特にドラブルの第7作目の小説 *The Realms of Gold* (1975, 以下 *RG* と略す) は、共同体と連続性を強く肯定した作品であり、ドラブルの作品中、最も楽観的な作品と言える (Martin, 114)。

RG で顕著なことは、人間関係の有機的な結びつきを具体化し、そこに焦点を絞るために、ホーム・パーティや葬儀が意図的に使われていることである。ジグソーパズルのイメージは、ドラブルの他の小説でも頻繁に使用されるメタファーだが、*RG* でも、ホーム・パーティや葬儀という枠の中で展開される人間関係 (ジグソーパズルのピースの連結) を提示しようとする²。

このように、小説では“realms” (領域、範囲) が強調されているわけだが、本小説のタイトルが John Keats (1795-1821) のソネットから借用されていることから推測できるように、“realms” は旅、探求、想像的な探索行為という伝統的な男性のフレームを踏襲している (Liscio, 84)。それと同時に、小説の主要な女性人物 Frances にとっての“realms” は結婚生活、家族、親族などの人間関係でもある。これは人間にとって不可欠な共同体である一方で、そこから逃避したいと思わせる厄介な存在でもある。しかしながら、ドラブルは、結婚や家族という制度を破壊しようとはしない。むしろ、閉塞感や行き詰まりを乗り越えて、その枠の中で生き延びる人間を描いていく。フレームを壊すのではなく、フレームの中身を再構築し、生きやすくすることは可能だと考えていく。*RG* では、登場人物たちは共同体という領域から逃げるのではなく、「黄金の国」、言い換えればユートピアを探索し、ユート

ピアは存在しないと知ったあとで、その領域を再考し、再構築を試みるのである。これがダブルの手法である。

本稿では、パーティや葬儀といった集まりの中で、ダブルが提示した「黄金の国」の再構築の方法を検証し、何らかの結論を導き出したい。

1. Janet のホーム・パーティ

本小説のヒロインは30代半ばの考古学者 Frances Wingate (旧姓 Ollerenshaw, 離婚歴があり4人の子供を育てている)であるが、この章では Frances の遠縁の女性 Janet Bird (旧姓 Ollerenshaw) にまず注目してみたい。Janet は共同体の中で窒息しかけている。

Janet はイギリス北東部の地方都市 Tockley (小説上の町)に住む20代半ばの専業主婦である。彼女の家族は、化学技術者としてプラスチック工場で働く夫 Mark と赤ん坊 Hugh の三人暮らしである。住居は小綺麗な一戸建て、贅沢はできなくても不自由のない生活を営んでいる。赤ん坊を乗せた乳母車を押しながら街を歩く Janet の姿は専業主婦の平穏な日々を想像させるが、その背後には倦怠と孤独が隠されている。だが、彼女は現在の生活から脱出するための経済力も勇気も持ち合わせない。むしろ、夫の同僚夫婦をもてなすためにホーム・パーティの準備に取り組むのである。

料理には自信がないものの、結局、「料理が好きだろうが嫌いだろうが、どうでもいい。どうせ好きでもない客が来るのだから」(RG, 117)と Janet は開き直る。パーティについても、「なんとばかげたことか。お気に入りの服を着て、よその家に行き、互いの夫を眺めるなんて」(144)と吐き捨て、パーティの無意味さを皮肉ってみせる。3組の夫婦が集うホーム・パーティで、Janet は上滑りな会話を操るほど器用な人間ではなかったし、気の利く聞き手にもなれない。特に夫 Mark の的はずれなジョークには自尊心が傷つけられ、彼の言葉や態度に怯えているが、そうかといって夫に反抗もしな

い。

さて、このホーム・パーティの最中に停電というハプニングが起こる。この時、ホーム・パーティは「魔法の瞬間」に変貌する。Bill の妻 Anthea が気の利いた話題を提供することで、暗闇の中で3組の夫婦は一体化する。Anthea は、ろうそくの光に照らされて、凍え死ぬまでここに座っていたいと言う。彼女の想像はふくらむ。この6人の凍った標本はジオラマ（立体模型）となって町の博物館に展示され、その題は「1970年代の地方都市におけるディナー・パーティ」となるだろう。Janet の居間も博物館に移築され、ローマ時代の遺跡と同じように陳列されるかもしれない。百年か二百年のちの人々がこのジオラマを見て、感嘆の声をあげるのを聞くのはすてきだと Anthea は言う（148）。このように、過去と現在と未来が6人のホーム・パーティに連結された瞬間に、今度はコーヒーの湯を沸かしながら、6人は原始時代の感性を体験する。

本稿の第4章で言及されるが、考古学者 Frances は言葉への過信がなく、“non-verbal communication”（104）の価値を評価できる人物である（Liscio, 132）。文明は文字の記録を評価するので、ギリシア・ローマへの評価に限定され、原始社会は過小評価されがちであるが、Frances はこれに疑義を抱いている。同じように、Janet も、Frances の価値観を共有できる人物である。6人はろうそくの光の中でたたずみ、コンロの火の上で湯が沸くのを見つめている。鉄器時代の人々が鉄を作るために、科学に頼るよりも、神にその誕生を祈ったように、彼らも湯が沸くことを神に祈るような気分で一心に見つめるのである。彼らが凝視する対象は、湯が沸くこと、それ自体の神秘性であった。

It [a little cooking stove] flickered up, blue and spiritual, sad and cold in colour, although warming the small copper pan. They [six persons] all watched, spellbound, for the water to bubble, as though watching the

process of boiling for the first time. Each small bubble seemed to swell from some deep spring. It was not the coffee they wanted, it was the magic of the process, it was not the triumph of the process but the magic of it,... The water bubbled, and Janet made tiny cups of coffee, more an offering than a drink. (RG, 149) [下線は筆者]

Anthea はこのあとで、復元されたイケニ族の村を見学した思い出を話す。その復元物を“one of the most beautiful historical reconstructions” (149) と表現するが、停電と Anthea の機転の利いた会話のおかげで、Janet のホーム・パーティも一時的に‘re-construct’されるのである。パーティが再構築されたことで、Janet は Anthea に好感を抱き、人間関係への期待を抱く。ここでは、Ruderman の指摘が的確に対応する。作家ドラブルは、「家庭という場を、ものごとを変える力が内包した特別な場所へと変容させることのできる作家のひとり」である (Ruderman, 112)。

だが、魔法のひとつときは永久には続かない。彼らの会話は出生率とセックスの話題へと移っていく。彼らはいつもの主体性のない偏見に満ちた俗物となり、彼らが発していた色も、ろうそくの明かりのもとで、黄金色から黄疸患者のように黄ばんでしまう。

Janet は結婚にも懐疑的である。例えば、結婚式を間近にした花嫁に贈られる品物を次のように表現している。

There is some tribal insanity that comes over women, as they approach marriage: society offers pyrex dishes and silver tea spoons as bribes, as bargains, as anaesthesia against self-sacrifice. Stuck about with silver forks and new carving knives, as in a form of acupuncture, the woman lays herself upon the altar, upon the couch, half-numb. (RG, 113)

花嫁は自己犠牲に耐えるための麻酔薬として、銀のスプーンやフォーク、肉

切り包丁を与えられるが、そうした道具で、花嫁は、^{はり}鍼治療のように突き刺され、やがて祭壇の上の生け贅となる。結婚祝いの品々から連想される戦闘や生け贅のイメージは、のちの Frances のイメージ「女闘士ブーディカ」へと連結しているので、武器と生け贅のメタファーは、Janet と Frances の一族の連結の伏線となる。Janet は包丁で夫を刺し殺すことができないから、その代わりに、パーティ用の鶏をナイフでさばくのである (125&138)。

Janet には結婚という枠組を打ち破るほどの強さがないから、彼女は大惨事が天から降ってくるのをひたすら願っている。彼女の好きな小説は、強制収容所に連行される途中でユダヤ人の母親が列車からポーランド人の農夫の女に自分の赤ん坊を投げ捨てるという筋書きの小説である。これは、抗いがたい状況下で子供を手放すという Janet の潜在的願望を示唆している。彼女は自分の力ではなく突然の大惨事によって生活が劇的に改変、あるいは崩壊するという荒唐無稽な考えにとらわれている。災害は抵抗のエネルギーの代替物となって、自分の世界を壊してくれるから、その時こそ、そこから脱出できると信じ込もうとする。

実際には、結婚生活を改善するためには、彼女自身が変わる必要がある。「人間の心は多くの現実には耐えることはできるが、間断のない憂鬱にいつまでも浸っていることはできない」(RG, 121) と語り手が言うように、Janet は美しい夕空を眺めながら、「もっと目を上げよう」(136) と思う。無意識ながら、彼女は自分を変える必要性に気づいているのである。

次の局面では、Janet は実際に、親類の老女 Constance Ollerenshaw (以下、Con と略す) に会うために出かけていく。

2. デイナー・パーティへの誘い

遠縁の大叔母 Con への訪問は Janet の転換点となる。Con は、Janet が訪問した6カ月後にコテージ (Mays Cottage) で遺体となって発見される。

Con は足を骨折し、そのまま飢え死にするのである。この事件は、Frances の実家 Ollerenshaw 一族の醜聞となる。Con に最も近い血縁者は Frances の父 Sir Frank Ollerenshaw (Con の甥) であった。彼は動物学者で新設大学の副学長の地位にある人物であるし、彼の娘は高名な考古学者 Frances Wingate であったために、マスコミの標的にされる。

この事件を契機に、Janet と Frances の親類としての交際が始まる。白髪でわし鼻の Con の容貌 (“like a witch,” 260) は、三人の女 Janet (“a witch,” 158)、Frances の兄 Hugh の妻 Natasha (“The Witch of Endor,” 169)、そして Frances (“Boadicea, Queen of the Iceni,” 185) との関係において、「魔女」というキーワードで共通しているので、Con との出会いが女性の連結を示唆している。

まず、Janet と Frances の出会いの場面を例にとってみよう。Frances の目には訪問先の Janet の住まいは陳腐で、その人生も、閉塞的であると察知される。二人の会話はかみ合わないまま時間だけが経過していくが、この時、停電したホーム・パーティの場面のように、二人に魔法の時間が訪れる。Janet は、Frances がどんな人間であるかは服装から判断できると唐突に切り出す。服装から人を判断するという陳腐な規準を利用して、逆説的に Janet は自分の洞察力を示す好機を得る。

‘Well, you know what I mean,’ said Janet Bird, gesturing, in a slightly camp, surprisingly confident manner, at Frances’s jersey, and her muddy shoes. I mean to say, look at your clothes. When would I ever dress up like that?’ ‘I’m not *dressed* up,” wailed Frances, ‘this is what I wear, I can’t help it.’ (RG, 296) [下線は筆者]

ジャージと泥まみれの靴という France の身なりは、Janet の清潔な衣服や住まいとは真逆である。「私もそんなふうに着飾ることがいつかできるで

しょうか」という Janet の機知に富んだ発言で、二人の心は急速に接近していく。素朴で飾らない服装ができるのは自信に裏打ちされてこそだと明察する能力を、Janet は披露する。本質を見抜く魔法の言葉に触発されて、固い雰囲気は溶け、このあと、二人は夕食にくり出す。

この出会いを契機に、親戚づきあいという口実で、Janet は Frances との交際を継続していく。Janet は Frances を通して閉塞感から救出されるのである。この二人の関係を、ギリシア神話のペルセポネ（娘）とデメテル（母）の関係性の中で、Little は分析している（Little, 44-52）³。Janet の人生は大惨事が起きなくても、いずれ変化するかもしれない。今しばらくはその時を待っているだけだ。彼女は、今後も結婚生活に耐えるのではなく、今は変化の時を待っている時期である、という思いに至る。この認識は、ドラブルの初期作品 *The Garrick Year* (1964) のヒロイン Emma Evans と同じ心境でもある（Chap. 12, 223）。

平凡な結婚生活というフレームの中でも、意味のある暮らし方是有り得るし、潮時を待つという考え方によって、Janet は子育てを中心にした現在の生活が無駄なものではないこと、そして、何よりも家族以外の人々との時折の交際を通して、世界を広げていく必要性を理解していく。フレームを拡張することで、Janet は家庭生活を再構築していくのである。

3. Frances の過去への旅

ドラブルの小説では、多くの女性人物は故郷や子供時代に過ごした場所へと旅に出る。RG でも、30代半ばの考古学者 Frances Wingate は精神的な危機の際に、具体的には恋人 Karel Schmidt と3カ月前に別れたことで生じた焦燥感に誘発されて、子供時代に過ごした場所やその周辺に戻って、過去の中に現在と未来への回答を捜そうとする。

Frances の父方の一族は皆一様に鬱病に悩まされていた。Frances も慢性

的な鬱病であったし、兄の Hugh も酒を飲んで鬱病をごまかしていた。妹 Alice も大学時代にガス自殺で死亡していた。父 Sir Frank Ollerenshaw はイーストミッドランドの温室栽培農家の一人息子として育つが、突然変異的な有能さで動物学の教授となった。その父も今は口数が少なく、何時間も虚空を見つめ、不可解な様子を見せていた。また甥の Stephen (兄 Hugh の一人息子) も、赤ん坊を道連れに森の中で自殺する。

Frances は土地と家族の気質には強いつながりがあると信じ、ミッドランドの沼沢地帯の水と土には、性格をねじ曲げる毒のようなものがあると考えている。

‘After all one does still have family links, kinship links, with the landscapes one’s parents and grandparents were born in... I’ve often thought that there must be something in the soil there, in the very earth and water, that sours the nature. I often think that in our family—we’ve got some hereditary deficiency. Or excess. I wouldn’t know which. Like fluoride. And that, combined with the flatness of the landscape, was what did it.’ (RG, 85) [下線は筆者]

Frances は自分の喪失感や鬱状態の解決の糸口になり得るものを探しに、フェンズ (沼沢地帯) に出かけることを決心する。人間と環境のつながりを信じる背景には、Frances が過去、現在、未来のつながり、祖先、家族、個人のつながりという一連の絆を無視できないと感じているからでもある。その意味で、Frances は、個人は他人との関係性の中で意味と価値を持つと考える (Rose, 98)。この考え方は、大学時代の教師の言葉とも一致し、彼女の信念ともなった。

‘[you] treat it [depair] as part of a pattern, part of a cycle... You must learn to see life as a cycle, not as a meaningless succession of mutually

exclusive absolute states.' (RG, 6)

人生をひとつのサイクルとして見るようにという、Frances のかつての教師の助言は、一定の枠の中で物事は有機的につながっているという概念への示唆である。現在につながる過去や、自我に関わる故郷の連結を信じるがゆえに、その連結を無視したり、そこから逃げてはならないと Frances は悟っている。言い換えれば、時間と空間という枠組の再考のために、彼女は Tockley の町に旅立つのである。

メイズ・コテッジ（大叔母 Con のコテッジ）への Janet の訪問が結婚生活の再構築のための転機となったように、Frances にとっても、祖父母の住まいイール・コテッジ（Eel Cottage）への訪問は、一族との接近と結合、そして一族の再考と再構築を促していく。結論から言えば、過去は、過去への憧憬を充足させてはくれないが、アンビヴァレントな人間関係の意義を再確認させている。

イール・コテッジは、子供時代との連続性ゆえに、ある種の安定感を象徴しているので、Frances はそこに戻ることでも慰撫されると楽観視していたが、その期待は見事に裏切られる。彼女は、イール・コテッジにたどり着くまでの風景を見て、まずは失望を味っている。

She [Frances] had remembered the route well, but it was utterly, utterly changed. Nothing was left as it had been. Landmarks had disappeared, new ones in the form of garages and discount stores had risen. And, to her mounting dismay, she realized that there was no country left. The whole road was built up, lined with houses. In the old days, it had taken five minutes to get out of the town, right out, into a dull but rural country. Now, it seemed, there was no country. After a quarter of an hour they were still driving through semi-detached houses, bungalows and estates.... This was what she feared. What had she expected, some untouched corner

of Britain, a rustic paradise, unreachd by road and supermarket and over-population? The town was thriving, anyone could see, it was expanding. (RG, 99-100) [下線は筆者]

この土地に期待していたものは手づかずの田舎、牧歌的な楽園、道路もスーパーマーケットも人混みもない小村だったのかと Frances は自問する。その一方で、現在の町の繁栄を喜ぶべきでは、とも思う。憧れと幻滅、現実からの離反とその直視と受容という二律背反的な状況のもとで、彼女は次のことを認識する。私たちは駆逐された黄金の世界を求めているが、そもそも黄金の世界というものは未だ存在したことはなかった。労苦と生存、残虐行為と倦怠があっただけだという認識である (107-108)。イール・コテッジは今も昔も “a gloomy dump” (陰気なあばら屋, 181) であり、それは “the real thing” (181&182) であった。

過去への憧憬を探し求めたから、Frances の過去への旅は失敗する。次の2つのエピソードもその顕著な例である。小学校の運動場で石を拾う母親と子供たちを見た時に、彼女は古代の強制労働の場面を連想してしまう (105-106)。次に、町の博物館に展示されたウナギ突きの道具 (“an eel stang,” 106) を見た時も、運動場の光景を見た時と同じ憂鬱を覚える。それは掘割りにいるウナギを「捕まえる」 (“trapping,” 106) ための道具だったが、Frances は道具の説明文の文字を読み間違えて、先のとがった道具を、ウナギを無益に「追立てる」 (“turning,” 106) ための道具だと思い込み、ワーズワス (William Wordsworth, 1770-1850) のヒルを集める老人が従事する掘割りの労役を連想する。その連想は運動場の強制労働と同じように、強いられた過酷な労働の構図である。ヒル取りの老人は、ワーズワスにとっては、「適切な警告によって人間のな力を与えるために遠い地域から遣わされた人のようで」 (“Resolution and Independence,” st. XVII, ll. 118-119) あったので、詩人に精神的な恩恵を付与しているが、Frances の場合は、石

拾いやウナギ捕りは過去を憧憬することへの警告となる。

しかしながら、同時に、先祖の生活は苦役のみに終始しているわけではない。Frances の祖先は何世代も畑で石ころを拾い集め、イール・コテッジの祖父はトマトとジャガイモを細々と栽培したが、その息子 (Frances の父) はイモリの研究で動物学の教授になった。彼女自身も先祖の労苦のおかげで、著名な考古学者となり、高級ホテルでくつろぐ贅沢も味わっている。過去が現在に語りかける事柄は曖昧で複雑である (Higdon, 156)。ここでは、Frances は一族の過去と現在の複層的な再構築を試みている。

次に Frances は肯定的な過去の思い出を拾い上げようとする。過去は幻滅と労苦の積み重ねに終始するわけではない。恋人 Karel との思い出はその好例である。二人でサンドイッチを食べた時のつかの間の幸福感 (RG, 58-59) や、旅先で目撃した、配水管の中の何百匹ものカエルの光景などである (17, 211&312)。祖母のコテッジを媒介にして黄金の国を見つけることはできなかったが、少なくとも、子供の頃、コテッジを訪ねた時に味わった喜びを彼女は思い出すことができた。

人間の過去は、遠くは祖先、近くは親しい人間関係との有機的なつながりを想起させるための手段として機能する。過去は、厭わしい過去の出来事を突きつけることもあるし、またある時は、ワーズワスの自然との親交のように、良き日を喚起させるための “spots of time” (Leeming, 16; 神と交感するような高揚感で自然と感応する特別の瞬間で、自然との一体感を感じる一瞬。 *The Prelude*, Book XI, l. 258) にもなり得る。Bromberg も指摘しているように、ワーズワスにとっては、その回想の瞬間自体は詩人を鼓舞するために重要であったが、Frances の場合は、その回想の瞬間は、風景から得るインスピレーションよりも、むしろ人間関係の重要性に気づかせる瞬間となっている (Bromberg, 53)。

次の局面では、Frances は大叔母 Con の死に直面し、葬儀によって家族を集結させていく。

4. 葬儀での集合と不揃い

本稿の第1章で見たように、湯沸かし用のコンロの火を見つめる時、Janet と友人たちに「魔法の瞬間」が訪れ、6人のパーティが有機的な人間の集いに変容したように、Frances も火のそばでたたずむ時に、イケニの女王ブーディカのように、一族をたぐり寄せる女族長（“the matriarch, arranging funerals,” *RG*, 266）になっていく。彼女は大叔母 Con の葬式を取り仕切ることで、家族の再発掘と再構築を行うのである。

Frances の遠縁で地質学者の David Ollerenshaw はアフリカのアドラで開催される学会に向かう途上で、アルジェリア人の兄妹と出会うが、その妹が言った言葉はのちの Frances の姿と重なる。この二人の兄妹は、通常は交流のないままパリに在住していたが、アルジェリアの養老院の母親を看取るために、帰省の船旅をしている。「母の死が二人を引き合わせたのです」（“Death brings us together,” 202）と妹は初対面の David に淡々と語る。同じように、Frances もアドラにおける学会中に、大叔母 Con の死亡の報にふれる。急ぎょイギリスに帰国し、Frances は葬式を取り仕切り、一族を集結させる求心的な働きを担うこととなる。

アフリカの遺跡を発掘するように、Con の埋もれた人生を開示させるのも Frances の役目である。Con とメイズ・コテッジは、アフリカの Tizouk（Frances がサハラ砂漠で発見したフェニキア人の商売の拠点となった町）の発掘のように、“Sleeping Beauty’s terrain”（274）として、探索・発掘されるのを待っている。

メイズ・コテッジの探索は、Ollerenshaw 一族への探索となり、Con と Frances の連結をも含意している。Kaplan は、調和と統合の確立と同時に内側へと入っていくことで達成される成長、これが本小説の子宮のイメージであると述べているが（Kaplan, 134）、メイズ・コテッジは過去と現在と未

来の結合を促す創造的（子宮的）な場所となる。ドラブルの小説で頻発するように、ここでも Frances は机の引き出しから一族の過去の記録を探し出そうとする。考古学者として、起源に遡る仕事をしてきたから、彼女は仕事を通して歴史を循環していた、と言える。これは、オックスフォード時代の教師が教えてくれた言葉、「人生を関係性のない事象のつながりとしてではなく、ひとつのサイクルとして見るように」（RG, 6）という助言を踏襲したものである。

Frances は、引き出しを探って過去をたぐり寄せ、一族の歴史の再構築を試みる。引き出しの中には、Con の若い頃の写真、Con が生んだ娘の出生証明書、18カ月後に死んだ娘の死亡証明書、養護施設の請求書（Con が療養した精神病院からかもしれない）、Con の母親がアバディーンに送ったハガキ、娘（赤ん坊）の父親 John Lincoln の手紙の束と新聞の切り抜きなどがあった。新聞の切り抜きには、娘の父親が既婚者でボストン港（イギリス）の船乗りだったこと、35歳の若さで船から落ちて死亡し、妻と二人の子供が残されたことが報じられていたが、Con からの手紙は一つも残されていなかった（279）。

Frances は、ギリシア・ローマ文明と原始社会を比較して、前者を言葉や記録によって確立され評価されたもの、後者を公的な記録がほとんど存在しないものとして、比較・対照化している。Con も書いたものを残していないので、その存在意義が過小評価される運命にある。だが、Tizouk の町が Frances の想像力によって発掘されたように、彼女は想像力によって、存在しないと思われるものの存在を浮上させる。Liscio は Irigaray を引用して、女性の流動性のある感性が男性の固定した定義や枠組みを破壊する力を持つと指摘しているが、メイズ・コテッジの Con の人生を蘇らせたのも、言葉に依らない事象を評価する Frances の能力によるものである。Con の存在は、Tizouk を人に移し替えたヴァージョンと言える（Liscio, 12, 19&132）。Con の人生、具体的に言えば既婚男性との恋、子供の出産とその死、自責

の念、牧師の妨害、両親の非難などの混在する Con の人生は、Frances の人生と同じように、希望と絶望が混在したものと確認される時、Frances は大叔母 Con とつながっていく。Frances は、「Con が質素に、しかも希代の変人として」(RG, 274) 生き抜いたことを実感するのである。自然に抱かれた Con のコテージも、Frances の今後の生活に連結されていく。

She [Frances]... stood quietly in the middle of the now dark room. It did not seem to her too bad, the way that Constance Ollerenshaw, her great-aunt, had lived and died. And the cottage felt all right. It even had a feeling of home. It was contained, it was secret. It had none of the rural bleakness of Eel Cottage, none of that open struggle. Nature had gently enfolded it, had embraced it and taken it and thicketed it in, with many thorns and briars; nature had wanted it, and had not rejected it. (276)

[下線は筆者]

面識のない大叔母 Con の存在が、コテージを通して実体化し、Frances 自身に統合された時点で、彼女は葬儀という一族の儀式を取り仕切る。Con とのつながりを実感できた今、Frances の心の傷は幾分癒やされ、今度は人々を回復させる側に立つ。これは本稿の第2章で Frances を媒介にして Janet が回復していく場面ですすでに眺めた通りである。

葬儀によって、この小説の4名の主要人物は一カ所に集合する。Frances と恋人の Karel、それに遠縁の Janet と David である。他には Frances の兄 Hugh と父 Sir Frank Ollerenshaw、牧師の Mr Fox Harold と事務弁護士の Harold Barnard、それに地方紙のカメラマンも参列している。

この場面で、「死が私たちを引き合わせたのです」という感傷的な台詞に見合う状況は実現されているが、葬儀に集う彼らの思いは不揃いである。介入的な語り手は、葬儀の参列者が考えていることを読者に披瀝しようとする。Leeming が指摘するように、第7作目の RG からは、三人称の語り手は

“interventionist narrator”となる (Leeming, 12)。各人の心の中の思いが提示されたあとで、語り手は、父 Sir Frank Ollerenshaw と事務弁護士の Harold Barnard についてのコメントをためらう。

As for Sir Frank Ollerenshaw and Harold Barnard; who knows what they were thinking? Omniscience has its limits. The speculations of Sir Frank are beyond speculation, ... (RG, 310) [下線は筆者]

語り手は、「全知にも限界がある」と言って、Sir Ollerenshaw と Barnard の心の中に入ることを拒絶する。

語り手の語りの放棄は、このあとも繰り返される。Frances は、Con の死を契機に、葬儀という有機的な集まりを作り出し、家族をここに集結させる。その一方で、人間の集まりは流動的かつ不安定で、語り手にも列席者すべての心理は把握できるものでないと留保の態度が示されている。共同体の中身は団結や一致などでくられるほど安易な構造ではなく、むしろ、その内部は常に変化し、変形し、移動している事実が提示されている。共同体は固定せず、その内部は定まらず、再構築を繰り返す余地を持つ、ということである。

語り手は、地質学者の David Ollerenshaw について、“character”として理解することも、彼の物語を膨らませ、小説内に組み込むのも困難であったという事実を明かしている。

The truth is that David was intended to play a much larger role in this narrative, but the more I [narrator] looked at him, the more incomprehensible he became, and I simply have not the nerve to present what I saw in him in the detail I had intended. (RG, 163)

語り手が吐露する語りの限界や不安定性は、ポストモダン的な 'metafiction' の構造を明示していると同時に (Creighton, 83-84)、固定化を拒み、不安定に流動する共同体に呼応させる意図的な工夫であると言える。

結び　メイズ・コテッジという箱の中のオープン・エンディング —結末のない結末—

本小説には二つのコテッジが出てくる。一つは Frances の父方の祖父の住居イール・コテッジである。このコテッジは、Frances が過去を探索するための突破口として選んだ場所である。結局、子供時代という過去はユートピアではなく、陰気なあばら屋の日々であったという事実に向き合うことになる。同時に、イール・コテッジへの訪問は、土地と家族の連結、そして人間関係と家族の再考を促した。過去は、楽園のヴィジョン、つまり過去への憧れを充足させてはくれないが、現在と過去の多層的な理解を促してくれた。

もうひとつのメイズ・コテッジでは、前章の第4章でも眺めたように、Frances は、面識のない大叔母 Con の人生の軌跡を掘り起こし、大叔母と自分の連結を実感する。その後、コテッジを購入して、その絆を継続的なものにする。ここでも共同体の回復が図られている。コテッジを媒介にして、遠縁の Janet と David とも交流し、恋人 Karel との関係も続行し、Karel の3人の子供たちの訪問も実現する。ここは黄金の楽園ではないが、自分に合っていると Frances は言う。

...it [Mays Cottage] may not be Paradise, but it suits me [Frances]. It never looked as nice as Hugh's and Natasha's cottage, but she liked it. It combined elements. It was not quite as spectacular a rediscovery and reclamations as Tizouk, but it offered many private satisfaction. (RG,

324-325) [下線は筆者]

Frances がユートピアを探してわかったことは、黄金の世界は存在しないが、家族や共同体の中には個人的な幸福の可能性もあるということである。その家族や共同体も、一定不変のものではなく、常に変化し入れ替わっていく。例えば、Frances と Karel は人口問題のことを考慮して子供を生むつもりはないとの説明のあとに、語り手は、「その先のことはわからない」(323) と言って、二人の今後の展開を不問にする。さらに、Frances と Karel と彼の妻 Joy の三角関係に関しても、Joy がレズビアンであったことで三人の関係が容易に解決されるプロット展開に対して、読者が不満を抱くだろうと予想した上で、

So there you are. Invent a more suitable ending if you can. (RG, 324)

と言って、語り手は語りの役目を放棄し、読者を挑発し、読者の不満をはぐらかそうとする。十全な結末を作り出すことは読者の手中にあると匂わして、結婚や家族の結末に絶対的なものがないことを強調しようとする。Joy がレズビアンだったというありそうもない状況を知らされた時に読者が見せる薄笑いを、ドラブルは当然予期しているが、ドラブルは、この意外性を、読者の期待と常識を故意に裏切るために利用している。人間の行動が予測不能であることの警告として、故意に Joy がレズビアンという「ありそうもないエピソード」を挿入したと言える (Sharpe, 230)⁴。

語り手は、Frances と Karel の結婚という安易な結末が、読者には納得できないだろうことを意識して、再度、下記のように、読者を突き放しながら、結末に余地を残している。

A happy ending, you may say. Resent it, if you like. She [Frances] will

not care: she is not listening. (RG, 324)

定まった展開はあり得ないという読者へのメッセージは、Frances が Karel と共に作った家族というフレームもその中で絶えず再構築がなされていく可能性をパラレルに暗示したものである。結婚生活や家族という共同体は、人間の営為にとって否応なく存在する枠組であり、人間関係を形成するフレームである。だが、その枠組は一定不変なものではなく、創造的で、人間の知恵と想像力によって常に進化し、変形し、発展していく。Janet と Frances の共同体との関わり合いを通して、我々はこれを熟知している。そうした再構築の可能性を内包した共同体、それが、小説のタイトル「黄金の国」の意味と真相であったと思われる。小説の結末部で、David のフラットが Frances の予想に反して魅力的であったように、語り手も Frances も同様に、人間性を洞察するには能力の限界がある⁵。

Human nature is truly impenetrable. (RG, 326)

その限界への認識が新たなものを生み出す原動力となっていく。ドラブルがこの作品で試みた共同体の再構築は、*Realms* 出版から5年後の作品 *The Middle Ground* (1980) ではさらに進化していくことも付記しておきたい。

註

- 1 *The Realms of Gold* 「黄金の国」いうタイトルは、John Keats (1795-1821) の優れたソネット “On First Looking into Chapman’s Homer” の第1行目のフレーズからの借用である。

Much have I travell’d in the realms of gold,

And many goodly states and kingdoms seen; (ll. 1-2) [下線は筆者]

- 2 ドラブルは、ジグソーパズルについてのエッセイを出版している。

The Pattern in the Carpet. London: Atlantic Books, 2009.

- 3 ギリシア神話の中で、娘ペルセポネ (Persephone) は冥界の王ハデス (Hades) に誘拐され、彼の妻として黄泉の国に住むことになる。母デメテル (Demeter) が苦難の末に得たゼウス (Zeus) からの妥協的な解決策は、娘ペルセポネが一年の四分の三を母デメテルと共に過ごし、残りの四分の一を夫ハデスと黄泉の国で過ごすというものである。
- 4 Parker と Todd のインタビューの中で、ドラブルは、この作品は “comedy” として書かれたので、結末において、Joy のような人物を退場させることができた、と述べている (Gillian Parker & Janet, 167)。
- 5 Eis は、伝統的な権威ある語り手、例えばトルストイの『戦争と平和』の語り手を例にとり、これとは異なったドラブルの語り手が道徳的な判断を回避していることを指摘している。この語りの手法が20世紀後期的な人生への対処方法に呼応しているという見解を、Eis は述べている (Eis, 101-107)。

Works Cited

- Bromberg, Pamela S. “Romantic Revisionism in Margaret Drabble’s *The Realms of Gold*.” *Margaret Drabble: Golden Realms*. Ed. Dorey Schmidt. Living Author Series No. 4. Edinburg, Tex.: Pan American Univ., 1982. 48-65.
- Cooper-Clark, Diana. “Margaret Drabble: Cautious Feminist.” *Atlantic Monthly*, 246, No. 5 (Nov. 1980): 69-75. Rpt. *Critical Essays on Margaret Drabble*. Ed. Ellen Cronan Rose. Boston: G. K. Hall & Co., 1985. 19-30.
- Creighton, Joanne V. *Margaret Drabble*. London: Methuen, 1985.
- Drabble, Margaret. *The Garrick Year*. London: Weidenfeld and Nicolson, 1964.
- . *The Realms of Gold*. London: Weidenfeld and Nicolson, 1975.
- . *The Pattern in the Carpet*. London: Atlantic Books, 2009.
- Eis, Jacqueline. “The Omniscient Narrator in *The Realms of Gold*.” *San Jose Studies* 8, No. 2 (1982): 101-107.
- Hardin, Nancy S. “An Interview with Margaret Drabble.” *Contemporary Literature* XIV, 3 (Summer 1973): 273-295.
- Higdon, David Leon. “Margaret Drabble’s *The Realms of Gold*, ‘its lines were the lines of memory.’” *Shadows of the Past in Contemporary British Fiction*. David Leon Higdon. London: Macmillan, 1984. 152-168. 208-211.
- Kaplan, Carey. “A Vision of Power in Margaret Drabble’s *The Realms of Gold*.” *Journal of Women’s Studies in Literature* 1, No. 3 (Summer 1979): 233-242. Rpt. *Critical Essays on Margaret Drabble*. Ed. Ellen Cronan Rose. Boston: G.

- K. Hall&Co., 1985. 133-140.
- Leeming, Glenda. *Margaret Drabble*. Horndon: Northcote House Publishers Ltd, 2006.
- Liscio, Lorraine. *Female Definitions of Self and Community*. Drabble. Diss. Boston College, 1987. Ann Arbor: UMI, 2001. 8807537.
- Little, Judy. "Humor and the Female Quest: Margaret Drabble's *The Realms of Gold*." *Regionalism and the Female Imagination* Vol. IV, No. 2, (Fall 1978): 44-52.
- Martin, Gyde Chris. *The Struggle for Continuity in the Novels of Margaret Drabble*. Diss. Texas Christian University, 1986. Ann Arbor: UMI, 1998. 8626099.
- Parker, Gillian and Janet Todd. "Margaret Drabble." Interviewed by Gillian Parker & Janet Todd. *Women Writers Talking*. Ed. Janet Todd. New York & London: Holmes & Meier, 1983.
- Rose, Ellen Cronan. *The Novels of Margaret Drabble: Equivocal Figures*. London: The Macmillan Press Ltd, 1980.
- Ruderman, Judith. "An Invitation to a Dinner Party: Margaret Drabble on Women and Food." *Margaret Drabble: Golden Realms. Living Author Series No. 4*. Ed. Dorey Schmidt. Edinburg, Tex.: Pan American Univ., 1982. 104-116.
- Sharpe, Patricia. "On First Looking Into the Realms of Gold." *Michigan Quarterly Review*, Vol. XVI, 2 (Spring 1977): 225-231.
- Wordsworth, William. *The Oxford Authors: William Wordsworth*. Ed. Stephen Gill. Oxford: Oxford UP, 1984.

Others

- Davis, Cynthia A. "Unfolding Form: Narrative Approach and Theme in *The Realms of Gold*." *Modern Language Quarterly* 40 (1979): 390-402. University of Washington. Rpt. *Critical Essays on Margaret Drabble*. Ed. Ellen Cronan Rose. Boston: G.K. Hall&Co., 1985. 141-151.
- Drabble, Margaret. 『黄金の王国』 浅沼昭子／大谷真理子訳、東京、サンリオ、1980.
- Homans, Margaret. "'Her Very Own Howl': The Ambiguities of Representation in Recent Women's Fiction." *Signs: Journal of Women in Culture and Society*

Vol. 9, No. 2 (Winter 1983): 186-205.

Korenman, Joan S. "The 'Liberation' of Margaret Drabble." *Critique: Studies in Modern Fiction* Vol. 21, No. 3 (1980): 61-72.

Little, Judy. "Margaret Drabble and the Romantic Imagination: *The Realms of Gold*." *Prairie Schooner* 55, Nos. 1-2 (1981): 241-252.

Rowe, Margaret M. "The Uses of the Past in Margaret Drabble's *The Realms of Gold*." *Margaret Drabble: Golden Realms. Living Author Series No. 4*, Ed. Dorey Schmidt. Edinburg, Tex.: Pan American Univ, 1982. 158-167.

Smith, Mary Ann. *Echoes of the Past, Intimations of the Future: Working through the Tradition of Industrial Fiction in the Novels of Margaret Drabble*. Diss. Boston College, 1994. Ann Arbor: UMI, 2001. 9509256.